

令和元年5月16日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02730

研究課題名(和文) 現代日本語における統語的階層性についての研究 - 英語分詞構文との対照から -

研究課題名(英文) A Research on Syntactic Configurationality of Modern Japanese - in Contrast to Participial Constructions in English -

研究代表者

大島 資生 (Oshima, Motoo)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：30213705

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語の統語的階層性を新たな視点から模索することを目的とした。具体的には、英語の分詞構文を含んだ用例とその複数の日本語訳を対照することで、英語・日本語それぞれにおける統語的階層性の具現のしかたを観察・検討した。英語分詞構文における主節事象と分詞句事象との間には「同じ状況の中で生起する」といった緩やかな関係性が存在することが明らかになった。現代日本語には分詞構文ほど幅広い関係性を表現できる形式はない。だが、古典日本語では連用形・テ形接続などが分詞構文に相当する機能を担っており、事象を並列的に配置するため平坦な構造を備えていた。その後連体修飾をはじめ階層的な構造を発展させたと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、英語分詞構文の主節事象と分詞句事象との間に「同じ状況の中で生起する」といった緩やかな意味的關係性があることが明らかになった。このことは英語記述文法に何らかの影響を与えることが期待される。また、今回の知見は一貫した文脈の中での分詞構文の寄与の仕方を考察した結果である。したがって、英語教育、中でも読解教育や翻訳指導に対する実際的な助言につながる可能性もある。一方、日本語に関しては、分詞構文に直接対応する構造は存在しないが、古典日本語の連用形・テ形接続には同様の機能が見られる。このことから、現代日本語に対して日本語史から考察することで新たな知見がもたらされるという可能性が確認された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to consider the syntactic configurationality of Japanese from a new standpoint. I observed how the syntactic configurationality is embodied in English and Japanese by contrasting English texts including participial constructions and their Japanese translations. Throughout English participial constructions, there is a common characteristic that the event expressed in the main clause occurs in the same situation as the event expressed in the participial phrases.

In contemporary Japanese, there is no such form that can express broad relations as participial constructions. But in classical Japanese, base-forms or Te-forms structures bore such functions. They juxtaposed events and made flat structures. Japanese language has later developed configurational structures such as adnominal constructions.

研究分野：日本語学

キーワード：分詞構文 階層性 複文

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

言語の統語構造を検討する場合、統語的階層性は最も基礎的な概念の一つである。ここで英語・日本語を対照して考えてみる。英語は日本語に比べて統語構造における階層性を強く意識する言語だという印象がある。

日本語に関して、近年の生成文法による分析の中では、統語的階層性を備えていることが所与のものとして前提とされているように見受けられる。このような捉え方を踏まえ、日本語学においても「て」「ので」「から」など接続助詞を伴う節を従属節として扱う場合がある。しかし、母語話者の直観としては主節と同じレベルに平坦に並ぶと捉えている。いわゆる学校文法において文を「単文」「重文」「複文」に分類することがある。「単文」は主語 - 述語の関係が一分のなかに1回、「重文」「複文」は2回以上見られるもので、重文はその関係が対等なもの、複文は対等ではないもの、とされる。日本語学では、学校文法で「重文」とされてきた構文を「複文」のなかに一括するやり方も見られる。しかし、学校文法が意味的な対等性(並立性)によって構文を区別していること、すなわち「重文」として意味的に対等なものを別立てしていることは、日本語母語話者の統語的階層性に関する直観をある程度反映しているのではないかと考えられる。

このようなことを背景として、本研究では、新しい視点から日英両語の統語的階層性の捉え方の差異を改めて明確化してみたいと考えた。

### 2. 研究の目的

英語は日本語に比べて統語構造における階層性を強く意識する言語だという印象がある。そのような特徴が特に明確にあらわれる構文の一つが分詞構文である。

A jet flew up into the air, making a great noise.

ジェット機が轟音をとどろかせて、上空に舞い上がった。

英語分詞構文は、定形動詞をもたず、表記上もカンマで区切られていることが多く、主節に付加した要素としてとらえられる。

他方、分詞構文で表わされるような状況が、日本語では上の例のように「～て、～」と並列的に表現されることがある。

以上のことから、本研究では日英語の構造に対する把握の仕方の差異が比較的明瞭にあらわれる構文として分詞構文を捉え、同構文と、それに対応する日本語訳を対照することを通じて、日英両語の統語的階層性の捉え方の差異を明らかにする。

### 3. 研究の方法

既存データを利用して、分詞構文に対応する日本語分の表現を分析する。その際、以下の点に留意する。

- ・各要素の訳出の順序
- ・原文分詞句部分を別の文として訳出するか否か
- ・原文分詞句部分までの一文とする場合、接続助詞を用いるのか否か
- ・接続助詞を用いる場合、その選択

データとして使用した作品は以下の通りである。

Scott Fitzgerald / The Great Gatsby

日本語訳 大貫三郎訳(1957年)・野崎孝訳(1974年)・橋本福夫訳(1974年)・村上春樹訳(2006年)・小川高義訳(2009年)

### 4. 研究成果

#### (1)分詞構文の分類

本研究では、この翻訳5種から得られた、分詞構文155例に対応する翻訳文について観察を行なった。その際、整理のために、分類をした上で検討した。まず、分詞句の文中での位置により、主節よりも前に置かれる場合(以下、「前置」と呼ぶ)と、後に置かれる場合(以下、「後置」)に大きく分けた。

さらに、後置について、分詞句の表わす事態と主節の表わす事態の関係から以下のように分類した。

因果関係	...主節と分詞句の間に原因 - 結果の関係があるもの
談話	...主節と分詞句の間に談話展開上、特徴的な関係があるもの。
動作 - 様態	...主節が動作を表わし、分詞句がその様態を表わすもの。
様態 - 動作	...分詞句が動作を表わし、主節がその様態を表わすもの。
動作連続	...主節・分詞句とも動作を表わし、それらが連続してなされることを表わすもの。特に、両者の前後関係が、一般的な常識によって解釈されていると

- 考えられるものをひとまとめにした。
- 同時的動作 ...主節・分詞句とも動作を表わし、それらが同時的になされることを表わすもの。
- 発話 - 動作 ...主節動詞が発話を表わし、分詞句の表わす動作がその発話行為と近接して行なわれることを表わすもの。
- その他 ...上のいずれにも属さないもの。

原文を上記の項目に分類し、さらに各文に対応する翻訳文が正順・逆順・不明(正順・逆順のいずれとも判断できないもの)のいずれの語順をとっているかを判定した。翻訳5種における訳出順のパターンを「正順:逆順:不明」の順で示し、「5:0:0」(すべて正順)、「3:2:0」(正順3、逆順2、不明0)のように記した。集計結果を表で示す。

正順	5	4	4	3	3	3	2	2	1	1	1	1	0	0	0	小計	総計
逆順	0	0	1	1	0	2	2	3	1	2	3	4	3	4	5		
?	0	1	0	1	2	0	1	0	3	2	1	0	2	1	0		
前置	31	1	2													34	34
後置	因果関係	14	1		2		2	2								21	121
	談話	14	1	1			3	1				2				22	
	動作-様態	1					3	3	7			1		2	3	20	
	様態-動作	9		4			2	1	1			1				18	
	動作連続*	3														3	
	同時的動作	2		4	1				2							9	
	発話-動作	5	1	1	1	1	2	1	5	1	1	3	1	1	2	26	
	その他	1		1												2	
総計	80	4	13	4	1	12	5	18	1	1	3	5	1	4	3	-	155

(2)分詞句が前置される場合

まず、分詞句が前置される場合をみよう。(1)の集計では前置が34例、後置が121例で、荒木・安井(1992)の記述とは異なる分布がみられる。今回は1作品のみを対象とした分析であり、作家の個性が強く反映されたためにこのような結果となった可能性もある。

分詞句が前置されている文では、主節と分詞句がともに動作を表わし、両者が時間的に近接していることが多い。そして、原文は動作の発生順に綴られていると解釈するのが自然な場合が多い。そのため、翻訳も原文と同じ語順、すなわち正順で訳すものがほとんどである。例を挙げる。

(例1) Making a short deft movement Tom Buchanan broke her nose with his open hand. (第3章・593) (5:0:0)

[野崎] トム・ビュキャナンが器用にちょっと手を動かして、彼女の鼻に平手打ちをくらわした。

[橋本] すばやいたくみな身ごなしで、トム・ビュキャナンは平手で彼女の鼻をひっぱたいた。

(例2) Turning a corner I saw that it was Gatsby's house, lit from tower to cellar. (第5章1295) (5:0:0)

[大貫] 角を曲ってから、ギャツビーの家で、上の塔から地下室の穴蔵まで、電灯をつけているのだとわかった。

[野崎] 角を曲ったとたん、それは、塔から地下室までこうこうとあかりをつけたギャツビーの邸のせいだと知った。

[橋本] 角を曲がると、ギャツビーの家が塔から地下室まで煌々と明りをつけているせいだとわかった。

[村上] 角を曲がったところで、それがギャツビーの屋敷のせいだとわかった。塔のてっぺんから地下室に至るまで、明かりという明かりが残らずともされているのだ。

[小川] だが、角を一つ曲がると、ギャツビーの家だということがわかった。塔のてっぺんから地下室まで、煌々と明かりが点いている。

(例2)では訳出する際の表現等細部が異なるが、いずれも正順で訳されている。

このように、前置の場合はほとんど全てが正順で訳されている。主語に先んじる文頭は情報伝達上きわだった位置であり、分詞句をあえてそこに配置することには特別な意味合いがある。すなわち表現者は、記述しようとするのがらの中で最も強く意識を向けているのがらを分詞句の形で文頭に置いて記述を開始していると考えられ、これは知覚された順と言っても良いだろう。それゆえ、動作が連続する場合、生起順に記述していくことが多くなる。こういった事情により、翻訳に当たっても前置された分詞句から訳出するのが自然なのであろう。

(3)分詞句が後置される場合

分詞句が後置されている場合について観察したことをまとめる。

因果関係・談話展開上の要因など、語順が事物間の関係により配列されている場合、原文通りの順序で翻訳される。

(例 3) There was a slow pleasant movement in the air, scarcely a wind, promising a cool lovely day.(第 8 章・2636) ( 5 : 0 : 0 )

[大貫]あたりの空気はゆっくりと愉しげに動く気配があり、それはあるとも知れぬ風のそよぎだったが、涼しい快い日和を前触れしていた。

[村上]緩く心地よい空気の動きがあった。風とも呼べないほどのものではあるが、涼しげな美しい一日をそれは約束していた。

(例 3)では主節が理由をあらわし、分詞句がその結果をあらわしていると解釈できる。

主節と分詞句が「動作」と「様態」を表わす場合、日本語における「様態 動作」という語順に合わせて翻訳される。

(例 4) He waited a moment longer, hoping I'd begin a conversation, but I was too absorbed to be responsive, so he went unwillingly home.

(第 5 章・1340) ( 0 : 5 : 0 )

[大貫]僕のほうから会話をきり出すのを望みながら、彼はもうしばらく待った。だが僕はあまりにも心を奪われたことがあって、応待なんかしていられなかった。そのため彼は仕方なし(原文ママ)家へ戻った。

[橋本]それでもなおちょっとのあいだは、わたしのほうから何か言い出してくれるかと待ちうけている様子だったが、わたしはほかのことに頭を奪われていて、相手になる気もなかったので、彼も不本意そうに家へひきあげた。

(例 4)では「待つ」"wait" という動詞が主節にあらわれ、分詞句が後続している。「待つ」という行為自体は具体的な動作を含まず、「～して待つ」「～ながら待つ」のように別の動作をしつつ時間を過ごすことを表わすことが多い。したがって、主節動詞が"wait"で、分詞句が「待つ」間に行なう動作を表わす場合、分詞句のほうの様態と解釈できる。そのため、逆順で訳される。

同時的動作、「発話 - 動作」においては、正順、逆順による意味的差異が明確ではない。

(例 5) No, said Gatsby, shaking his head.(第 7 章・2269) ( 2 : 2 : 1 )

正順(橋本・大貫) / 逆順(村上・野崎) / ?(小川)

[橋本]「ちがう」とギャツピーは言って、首を振った。(正順)

[村上]「違う」とギャツピーは首を振りながら言った。(逆順)

(例 5)は正順・逆順のいずれで訳しても、文意に大きな差が生じない。

また、次の例のようにセリフの途中で発話動詞や分詞句が挿入されている場合もよくみられる。

(例 6) "I'm going to make a big request of you today," he said, pocketing his souvenirs with satisfaction," so I thought you ought to know something about me.(第 4 章・1048)

( 3 : 2 : 0 ) 正順(大貫・橋本・小川) / 逆順(村上・野崎)

[大貫]「今日は君にとんだお願いがあるんだよ」と彼は言って、満足そうに記念品をポケットに収めた。「だから、少しは僕のことを知っておいてもらわなくちゃいけないと思ったんだよ。(正順)

[村上]「今日は君に、とてもだいじな頼みごとをしなくちゃならない」、記念品を満足げにポケットにしまいながら、彼はそう言った。「だから君に、私という人間をある程度わかっておいてもらいたかったんだ。(逆順)

(例 6)のように直接引用を含む文に分詞句が後続している場合、セリフと分詞句の表す動作は多かれ少なかれ同時的なのではないかと想像される。発話する行為と身体動作は独立している場合が多く、同時になしうるのが一般的であろう。ドラマや演劇などでも、自然なやりとりを演出するためには、セリフを言い終えてから動作を行なうよりも、セリフと同時、あるいはセリフの途中で動作を開始するほうが多いのではないだろうか。特に上の(例 6)のようにセリフの途中で発話動詞や分詞句が挿入されている場合、同時的であることを積極的に示そうとして

いると考えられる。逆に、直接引用を含む部分で一旦終止し、分詞句の表す動作を新しい文として表現してみると“～, said he. (And then) he ～”のように、時間的な前後関係が決定づけられる。このことから、「セリフ+発話動詞+分詞句」という構造では、発話動詞の表わす発話行為と、分詞句の表わす動作との時間的順序はさほど重要視されていないのではないかと推測することができる。つまり、この構造では発話行為と、分詞句の表わす動作が同じ状況の中で生起するのであれば、両者の間に前後関係があっても、両者が同時的でも構わないということである。

#### (4)考察

以上見てきたことから、英語の分詞構文は日本語のさまざまな構文に相当する内容を表しうることがわかる。ここから逆に、分詞構文一般に共通する特徴は非常に抽象度の高いものであることが予想される。上で発話と動作の関係については、主節の表わす発話行為と、分詞句の表わす動作とは、同じ状況の中で生起しさえすればよいといった緩やかな関係性をみることができる。この点は分詞構文一般に見られる特徴の一つといえるだろう。

日本語に目を転じると、現代日本語には英語分詞構文のように広範な意味領域を分担できる形式はない。他方、古典日本語においては、連用形接続などを連綿と綴る表現形式が珍しくなく、これが分詞構文に相当する存在のひとつだったと想像できる。橋本(2011)は、次のように述べている。

中古和文資料においては、現代語の感覚からすると許容しがたいほど多数の、非連体的節の連鎖が許容されている。

そして、次の例を挙げている。

この川にのみやは魚はあると思ひて、下りて、その川より渡りて、北ざまにさして行き、山には入りて見れば、大いなる童、土を掘りて、物を取り出でて、火を焚きて焼き集めて、また大いなる木の下に行きて、椎・栗などを取りて、この子を、「... (中略) ...」と問へば、「... (中略) ...」と言へば、「... (中略) ...」と教へて、この掘り拾ひ集めたる物どもをとらせて、童は失せぬ。(うつほ物語)

[ (この子どもは) この川だけに魚がいるわけではない (他の場所にもいる) だろうと思つて、川におりて、その川を渡つて、北の方を目指して行き、山に入つてみると、大きな童 (天童) が土を掘つて物を掘り出し、火を焚いて焼き集めて、また大きな木下に行つて椎や栗などを拾つて、(歩いてきた) この子に、「...」と問うたので、「...」と言うと、童は「...」と教へて、この掘つたり拾つたりして集めた物をこの子に与へて、童は消えた。]

また、「とて」のように、分詞構文に近い振る舞いをみせると捉えることのできそうな構文も存在した (鈴木(2009)、辻本(2016))。しかし、こういった形式は現代語では失われてしまっている。

現代日本語に至る歴史的変遷の中でこのような構文が喪失している理由として、一つには言語における伝達効率が挙げられよう。すなわち、日本語の文がSOVという基本構造をとる限り、伝達上、伝えようとする内容の大筋をなるべく早く伝えるには、文を短くするしかない。そのため、連用形接続などによって連綿と続く長い文を綴ることや、「とて」のような形式は忌避されるようになったのではないかと推察される。

一方、英語はSVOという基本語順が厳格に定まっている。それゆえ、主語があらわれると、ほぼその直後に動詞を置かなければならない。このことによって伝えようとする内容の大筋を素早く提示することが可能であり、この点で、極めて伝達効率に優れていると言える。しかし他方、主語に続いて動詞まで発してしまうと、そのあとは目的語や補語を述べて文を打ち切らねばならず、補足や、場合によっては軌道修正が必要になったとしても、新たに文を立ち上げるしか方法がない。だが、分詞構文を使えば、同じ文の続きとして補足的な情報を加えることができ、新たな文を始める必要はない。また、分詞句を用いて補足することにより、伝達内容に関してある程度までは軌道修正を行なうことも可能だろう。今回素材としているのは小説であり、あらかじめ設計された文章なので、今述べたような、臨時的な補足や軌道修正のために分詞構文が用いられているとは考えにくい。しかし、少なくともその場で補足しているかのような姿勢で文章を綴ることは可能である。したがって、小説家があたかも補足的に付加しているかのような態度を装いつつ分詞構文を用いている可能性は十分にあるものと考えられる。

本研究で検討対象としたのはすべて1作品から抽出した用例で、全部で150件あまりという小さなデータである。作家の個性が色濃く反映されている可能性もあり、英語分詞構文全体の特徴として一般化することは難しい。本研究で観察された傾向が真に一般性をもつのか、さらに多くの用例を収集した上で再検討しなければならない。また、本研究では翻訳文における訳出順にのみ注目して観察を行なった。しかし、翻訳文の長さの問題、また、大島(2017)で扱った「チャンク」という観点からは、翻訳文の、分詞句に相当する箇所を文を切るか、切らずに続けるかという選択について検討することが必要だろう。今後の課題としたい。

/ 引用文献 /

- 荒木一雄・安井稔編(1992)『現代英文法辞典』三省堂
- 大島資生(2017)「翻訳文における情報提示の順序について - 日本語連体修飾節と英語関係節の対照から - 」『人文学報』513-11 首都大学東京大学院人文科学研究科 pp.1~29
- 鈴木泰(2009)『古代日本語時間表現の形態論的研究』ひつじ書房
- 辻本桜介(2016)「主節主体の動きを表す動詞終止形に接続するトテについて  
引用と異なる機能の分析」『日本語の研究』第12巻2号 日本語学会
- 橋本修「上代・中古資料における非制限的連体修飾節の分布」  
国立国語研究所共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」発表会資料 2011年9月11日 於名古屋大学  
([https://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/files/20110911-020re/20110911\\_hashimoto.pdf](https://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/files/20110911-020re/20110911_hashimoto.pdf))

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計5件)

- 大島資生「翻訳文における情報提示の順序について(その2) - 関係詞 which を含む英文とその日本語訳の対照から - 」  
『人文学報』515-11 首都大学東京大学院人文科学研究科 pp.1~26 2019年3月 査読無
- 大島資生「間接疑問文による連体修飾について」  
沖森卓也(編)『歴史言語学の射程』三省堂 pp.380(231)~369(242) 2018年11月 査読無
- 大島資生「「いかに〜か」構文について - 状態化をもたらす条件 - 」  
『都大論究』第55号 東京都立大学国語国文学会 pp.(1)~(11) 2018年6月 査読無
- 大島資生「英語分詞構文と、それに対応する日本語翻訳文について 訳出の順序を中心に」  
『人文学報』514-11 首都大学東京大学院人文科学研究科 pp.1~27 2018年3月 査読無
- 大島資生「翻訳文における情報提示の順序について - 日本語連体修飾節と英語関係節の対照から - 」  
『人文学報』513-11 首都大学東京大学院人文科学研究科 pp.1~29 2017年3月 査読無

[学会発表](計1件)

- 大島資生「日本語の相対名詞連体修飾の統語的特性について」  
(国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」  
文法研究班「名詞修飾構文の対照研究」平成28年度第2回研究発表会 2016年11月19日 於名古屋大学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。